

シャッターの落ちる瞬間に、和歌山が「見えた」

陳安娜

日本語・日本文化研修留学生 中国

私はシャッターの落ちる音が嫌いだった。シャッター音が聞こえるということは、世の中でいう「美しい」瞬間が単に画像として切り取られることを意味するからだ。しかし、打ちひしがれて、錆びついた歯車みたいに、交換すべきなのに無理やりギシギシと毎日を回している私には、その理由が全く分からなかった。その時は、きっと日本に行っても、思い出の写真なんて残らないと思っていた。9月の末、和歌山大学に足を踏み入れた瞬間、日研生の友達から「一緒に撮ろう！」と声をかけられた。「一年後私はどうなるんだろう」と考えながら、ソーダが舌の上で楽しく踊る中、その面白さを感じることができず、ぎこちなくポーズをとっていった。

ある日、磯ノ浦で撮った写真を振り返った。私の表情は、晴れ渡った空に照りつける強い日差しによって、険しくなっていた。笑っているのに、何とも言えないような顔をしていた。悔しかったが気を取り直して、私は再び友人を呼び、磯の浦のカフェでのんびりしていた。果てしない和歌山の海を眺めていたら、「この瞬間をいつまでも覚えていたい」という気持ちがわいてきた。私は知らず知らずのうちに、カメラを持ち上げ、シャッターを押していた。遠くにはアルプスのように雄大な山々、近くにはゆっくりと走っていく加太の猫電車、目の前には透明な海岸で笑い合う親子、次々とカメラに収まり、私の心にも深く焼き付けられた。シャッターは一瞬だが、穏やかなロングショットのように、和歌山ならではのゆったりとした雰囲気垣間見ることができた。



私はさらにこれまでの写真を掘り起こしてみた。高野山の壇上伽藍の前で驚嘆している私、白浜の風に強く吹かれながらも笑いがこぼれた私、マリーナシティで秋花火を見て目を輝かせている私…一枚一枚写真を見ると、和歌山との絆が次第に深まっていくのを感じた。写真の中でますますリラックスして自由になっていく自分が見えた。それは、和歌山では、現実的な悩みを抱えていても、自然の中をそぞろ歩くだけで、「山の香り、海の香り」が何度も私の心を優しく包み込んで

くれたからだ。普段は写真を撮るのが苦手な私も、思わずたくさんシャッターを押してしまった。和歌山がもたらしてくれた貴重な思い出は数え切れないほどあるが、シャッターを押している私はそのことに全く気づいていなかった。そこで、私は今まで気づかなかった和歌山を探しに行くために旅に出ることを決心した。

決心した後の旅は私にとって永遠に記憶に残るような思い出となった。それぞれの名所で、前には見えなかった、気づかなかったものに魅せられた。高野山の荘厳な雰囲気に

包まれた寺院では、友達と一緒に静かな瞑想のひとつを過ごし、心の奥底からリフレッシュされるのを感じた。白浜では、穏やかな波音と一緒に砂浜を歩き、夕焼けをバックに笑顔を交わし合った。そして、清水町の翡翠のような透き通った川には木漏れ日が揺れていた。生石高原の生い茂る木々は、自然の力が広がっていた。みさと天文台で星空を仰ぐと、照らしてくれたのは都会では見られない満天の輝きだった。古風な雰囲気漂う湯浅町では、歴史の息吹を感じながら街を散策し、地元の人々の温かさに触れることができた。白崎海岸の自然の造形美に見とれ、波に削られた白い岩々の景色が心に深く刻まれた。こうして和歌山を旅するたびに、この地の魅力を再発見した。そして、次はどの場所を訪れようかと考えると、また新たな好奇心が湧き上がってくる。和歌山は、いつでも私たちを迎え入れてくれる温かい場所であり、その魅力は尽きることがない。

和歌山は自然の魅力にとどまらず、人間味も溢れている。大学の先生は本当に優しく、日本語の授業はもちろん、緊急時の対処法や面白い和歌山弁も教えてくれた。また、WIN コンコード（留学生支援団体）の方々からは生活用品を貸し出してもらったり、和歌山各地を案内してもらったりもした。おかげで異国の地でも安心して過ごすことができた。その中で特に思い出に留めているのは、国際交流活動で出会った湯浅のおばあさんだった。初対面だったが、湯浅に温かく招いてくれた。ちょうどひな祭りの時期で、町中、かわいいひな人形でいっぱいだった。おばあさんはこれらの人形の由来を詳しく説明したり、日本の醤油発祥で名高い醤油蔵を案内したりしてくれた。おかげで私たちは日本の醤油の製造過程を直接見る事ができた。一緒に栖原海岸の淡い夕暮れに染められ、その日の感動をシャッターに収めた。別れ際におばあさんが言った「また湯浅に遊びに来てね！」という言葉と、ずっと手を振り続けてくれた姿、そして見送るその目を、私は決して忘れることはない。こうして、写真はもはや単なる自然風景ではなく、和歌山の人々との熱い出会い、別れ、そして再会の記録でもある。



シャッターを押すたびに、和歌山の豊かな自然風景を切り取り、ほのぼのとした人々とのつながりを感じ、ここで成長していく自分をレンズ越しに見つめてきた。帰国後、これらの写真を友達に誇らしげに見せて、「私の第二の故郷だよ！」と自慢げに笑うだろう。そして、また和歌山に戻りたいと思うに違いない。今度は、写真を撮られる側や和歌山の人々に世話をしてもらおう立場ではなく、写真を撮る側となり、後輩たちに世話をする立場として戻りたい。和歌山、ありがとう！これからもよろしくお願いします。

按下快门，留住和歌山的美好一瞬

陈安娜

日语·日本文化研修留学生 中国

我讨厌快门落下的声音。听到快门的声，就意味着映在眼前的定是动人的美景也好、重要的朋友也罢之类的世人所谓“美好”瞬间。归根结底那到底是什么样的感觉？长久低气压、如锈迹斑斑的齿轮般，早该换新却仍勉强吱呀作响日复一日转动工作的我根本无法感知。我讨厌那样的瞬间。我讨厌快门落下的声音。我想即使来到日本、来到和歌山留学之后我也定只会三点一线地学习、工作，不会留下任何所谓回忆的照片吧。这样想着的我，在来到和歌山第二天，踏进和歌山大学的那一瞬间，立马被日研生的朋友们招呼着“安娜，来拍一张呀！”。像跑光了气的苏打在舌尖就算起舞也只是没劲一般，我别扭地摆了个 pose，不禁想到：“不知道一年后再看这张照片，我又会怎么想呢。”

12月的某天，当我百无聊赖地翻着这三个月的相册时，翻到了与朋友们在磯之浦的合照。那上面的我的表情，可真是比朗朗晴空中高挂的日光更为刺眼。明明在笑，但好像是被人胁迫了一般，实在是与身后广阔的大海极其违和。出于一种莫名的后悔感，我再次叫上朋友，坐在磯之浦的咖啡厅中，面朝无际大海，“想要永远记住这一瞬”的想法油然而生。我不知不觉地举起了相机，按下快门的一瞬，远处宛若阿尔卑斯般壮丽雄伟的群山，近处缓缓驶过的加太猫猫电车，眼前透明海岸边嬉笑的母子，一一撞入镜头，也撞入了我的心里。镜头只是一瞬，但只要我细嗅蔷薇，就能如电影中不骄不躁的长镜头般，窥见和歌山独有的悠哉感。

我翻出更多照片，在高野山前被壇上伽藍惊掉下巴的我、在白滨风中凌乱却仍开怀大笑的我，在 Marina City 闪闪发光的眼中映出花火大会的我…每次拍下照片，都意味着我与和歌山的连结在逐渐紧密。看着照片中愈发松弛自在的自己，我才顿觉，在这里即使我因为现实种种焦虑不安，只需要漫步自然间，“山的味道、海的味道”就会一遍又一遍缱绻地抚慰我的心灵，让不喜欢拍照的我不自觉地留下了一张张照片。和歌山带来的珍贵回忆早已数不胜数，而照片中的我却丝毫没有察觉。于是我决定，再次踏上“看见”和歌山的旅程。

这次我不仅与朋友们一起重返了高野山与白滨，还去了许多之前未去的“小众”地点。透过镜头，我一次又一次为和歌山超出想象的美景所折服。翡翠般流淌的清水河川、广袤无垠的生石高原、星河闪耀 misato 天文台、古色古香的汤浅小镇、鬼斧神工的白崎海岸…每次旅行和歌山，我都重新发现它的魅力。当我思考下一次要去哪里时，又有了新的期待。和歌山，总是以温暖的姿态迎接我们，它的魅力无穷无尽。

这就不得不提到和歌山不仅自然风光令人流连忘返，还充满着暖心的人文关怀。学校老师们无微不至地关照我们，在课程中我们不仅仅只是学习日语，更学习到了紧急情况时如何应对、学习到了有趣的和歌山方言，让我们即使身处异国他乡也无需忧愁。和歌山特有的留学生组织 win concord 也事无巨细地丰富着我们的留学生活，不仅借生活用品给我们，还经常带我们去和歌山各处旅行，热心地为我们介绍介绍和歌山的各式文化。其中印象最为深刻的是，在国际交流活动中，结识的在汤浅居住的阿姨。在那之前我们素不相识，可是她们仍然热情地邀请我去日本酱油发祥地——汤浅做客。正值女儿节，汤浅镇到处装饰着可爱人

偶。阿姨不仅热心地为我介绍这些人偶的来源，还带我参观了酱油窟，让我直观地看到了日本酱油的制作过程。落日余晖的栖原海岸是如此美丽，我按下快门，将那一天的心情永远定格。我永远不会忘记道别时阿姨的那句“欢迎你再来汤浅玩！”以及她不停挥动的手、久久送别的目光。于是，照片不再仅仅是自然风景的记录，更是与和歌山人们的热情邂逅、离别和再会的见证。

每按下一次快门，我都在捕捉和歌山丰富的自然风景，感受着与当地人之间温暖的联系，同时也透过镜头看到了逐渐被治愈的、逐渐在成长的自己。回国之后，我一定会向朋友们自豪地分享在这里的每一张照片，自豪地笑道“看，这就是我的第二故乡！”并想要再次回到和歌山。我希望不再是被拍摄和被照顾的一方，而是成为拍摄者，照顾后来的学弟学妹。和歌山，谢谢你！今后也请多多指教！